

狂言とは、室町時代から息づく、おおらかな人間賛歌劇

物事を俯瞰で見るヒューマンコメディー、狂言。

室町時代に生まれた美しい所作や言い回しを受け継ぎながら、

“人間の今”を、洗練された笑いに表現。だから普遍的で、古くて、斬新です。

登場人物は人間だけとは限らず、虫や植物など森羅万象が相手となることも。

そんな大らかな人間賛歌劇・狂言の楽しみ方を、野村萬齋さんに伺いました。



Q1 狂言を観ていると、まるでその時代の庶民になったかのような感覚になることがあります。室町時代の人々もこんな風に笑っていたのかな、と想像しながらのんびり観るのもまた楽しいですね。そんなところも狂言の良さ、楽しみ方の一つなのでしょうか？

そうですね。奈良時代に中国から伝わった散楽という芸能が、平安時代に猿楽と呼ばれるようになり、脈々と受け継がれてきたわけです。この頃はまだ即興的な物まね芸で完成したものではなかったようです。今でいうコントのような、より身近なものとして楽しんでいたようです。

Q2 能・狂言、歌舞伎など日本伝統芸能の美意識には、共通するところがあるように思います。確固とした型があり、どんなシーンでも美を創出するというのもその一つかと。狂言ならではの様式美、美意識はどこにあるのでしょうか？

おっしゃるとおり、狂言の場合“型”と呼ばれるセリフの言い回しや所作に決まりがあって、その通りにすれば一応「狂言」が成立するようになっています。立つ位置、セリフの抑揚、細かい動きのひとつひとつが先人の知恵で洗練された技術“型”となって伝わっているのです。とはいうものの、役者の個性や時代を反映しますので、見え方は違っているかもしれません。私たち一門は、常に美しい狂言を目指しています。

Q3 今回の、東広島芸術文化ホールくららの演目「棒縛」[佐渡狐]の見どころを教えてください。

ふたつの狂言とも、初めてご覧になる方でも楽しめる分かりやすい狂言です。

「棒縛」は、狂言の登場人物の中で最もポピュラーな太郎冠者・次郎冠者が主役で、酒盛りのシーンでは、二人がそれぞれ縛られた不自由な手で舞う小舞(こまい)が見どころです。海外でもよく上演されています。「佐渡狐」は今流行りの言葉で言うと、村度やワイロのお話です(笑)。人間が昔も今も変わらないことが描かれています。

Q4 狂言師としての活躍に加え、現代劇や映画・テレビドラマ、また芸術監督や演出家として多方面においてその才能を発揮されています。野村萬齋さんにとって、「表現」とは何ですか？

自分の感覚や狂言の技術・考え方を使って作品を作ること。それを皆さんに提供し、ご覧になった皆さんが物事を考えたり、楽しんだりして頂く。それが表現者として喜びでもあります。

Q5 最後に、くららにご来場のお客様にメッセージをお願いいたします。

本日はご来場ありがとうございます。広島島の厳島神社には能舞台があり、能・狂言を身近に感じる方が多いかもしれませんね。あまり身構えずに、どこにでもいそうな人間の滑稽味を笑い飛ばして頂ければと思います。

野村万作・野村萬齋 狂言の世界2018

2018年11月29日(木) 18:30開演(18:00開場)

東広島芸術文化ホールくらら 大ホール

※詳細はチケット発売情報をご覧ください。